

第5回 新潟地区国立病院薬剤部科勉強会を 開催して

さいがた医療センター 薬剤科 新保 一

平成30年11月3日(土)、第5回新潟地区国立病院薬剤部科勉強会を開催致しましたので報告いたします。参加者は新潟県内3施設の薬剤師、谷地薬事専門職、山口国立がん研究センター中央病院薬剤部長（関信地区薬剤師会会長）、高橋横浜医療センター薬剤部長はじめ、県外の先生方多数のご

参加をいただき総勢28名の勉強会となりました。

今回の勉強会では、地域で活躍している薬剤師を招き、今年度の診療報酬改定ならびに昨今問題となっているポリファーマシーをテーマとし、勉強会を企画開催いたしました。（資料1）

最初に、上越地域医療センター病院薬剤科薬局長の宮川哲也先生（写真1）より、「病院薬剤師が知っておくべき薬局薬剤師の役割」として、平成30年度の調剤報酬改定を中心に病院薬剤師が関わることについて講演していただきました。

講演では、医薬分業における利点について、病院の採用薬品に縛られることなく、自由に医師・歯科医師が処方できること、病院薬剤師の入院患者に対する病棟業務へのシフトが可能となることが上げられ、「かかりつけ薬局」の役割として、複数診療科受診による重複チェックを述べられていました。また、近年調剤薬局の処方せん受取率

第5回新潟地区国立病院薬剤部科勉強会

日時：平成30年11月3日(土) 13:00～16:00
会場：国立病院機構 さいがた医療センター 講堂

会 次 第

司 会 新保 一 先生(さいがた)

開 会 の 辞 13:00～13:05 松倉 範明 先生(新潟)

幹事施設長挨拶 13:05～13:10 伊東 秀幸 先生(さいがた)

研 修 課 題

1. 講 演 13:10～14:00

「診療報酬・調剤報酬から考える地域包括ケアシステムでの薬剤師の役割」
上越地域医療センター病院 薬剤科 薬剤科長 宮川 哲也 先生

--- 休 憩 --- (15分)

2. 講 演 14:15～15:05

「ポリファーマシーから考える薬剤師の役割」
医療法人恒仁会 新潟南病院 薬剤部 武藤 浩司 先生

--- 休 憩 --- (15分)

感 想 15:20～15:30 関信地区国立病院薬剤師会 会長
山口 正和 先生(がん研究センター)

全 体 会 議 15:30～15:45 実行委員 村上 明男 先生(西新潟中央)
青山 大樹 先生(西新潟中央)

業 務 連 絡 15:45～15:55 独立行政法人国立病院機構 関東信越グループ医療担当
薬事専門職 谷地 豊 先生

閉 会 の 辞 15:55～16:00 樋口 順一 先生(西新潟中央)



写真1 宮川哲也先生

資料1

は上昇しているが、処方せん応需薬局についてはその門前薬局が応需の7割を占めていることを説明され、それは本来の考えとは異なっている旨の話がされていました。そして、厚生労働省の保険薬局への考え方、「患者のための薬局ビジョン」を基に、地域包括ケアシステムにおける保険薬局の今後の方向性をお話しされていました。また、「かかりつけ薬剤師」が導入されてからの、薬局の決め方、利用する理由、かかりつけ薬剤師について重視すること等を診療報酬改定の結果に係る特別調査を用いて話されていました。

先生の勤務されている「上越地域医療センター病院」での取り組みについて、外来では薬剤師外来の実施、トレーシングレポートの活用。入院では入院時の持参薬確認から処方提案。退院時には、かかりつけ医への薬剤管理サマリーの作成、保険薬局への情報提供等。入院から外来までの薬剤師としての関わり方について実例を挙げ説明されていました。また、診療報酬改定についても薬局薬剤師の視点から解説をしていただき、病院薬剤師と薬局薬剤師の連携はどのように行うべきか、どうあるべきかについてのお話もしていただきました。

次いで、医療法人恒仁会新潟南病院薬剤部の武藤浩司先生（写真2）より、「ポリファーマシーから考える薬剤師の役割」について講演していただきました。多剤投与・多剤処方の問題点、ポリファーマシーの概念（特に薬物有害事象のリスク増加、服薬過誤、服薬アドヒアランスの低下）について、基本的なことからお話をしていただきました。

ポリファーマシーの形成される過程（高齢者で

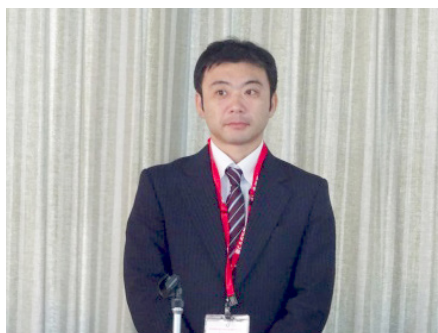


写真2 武藤浩司先生

は6剤以上の投薬が有害事象の発生増加に関連している、多病による複数医療機関・診療所への受診等）について、「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2005」に基づいて、当ガイドライン上での薬剤師の役割。中でも、「漫然と繰り返し使用されている薬を薬剤師が見直すことは有効か？」というCQに対し、薬剤師が定期的に見直すことで薬剤数の削減、薬物有害事象や医療費の抑制につながることを自施設での取り組み実例を挙げてお話いただきました。入院時の持参薬鑑別から処方提案（重複投与、腎機能評価、中止、減量）を検討、多職種との情報共有、副作用モニタリングを行う、退院時には薬剤管理サマリーの活用を行うこと等々。複写式の入院用処方せんに代替薬を印字し処方提案を行い、高齢者を対象とした処方設計、なかでも検査科と共同で行った「腎機能評価報告書」では、1枚のシートに薬剤師による腎機能の評価を情報提供する取り組みや、高齢者の摂食・嚥下機能低下のサインを提示し処方提案の材料としていました。また、向精神病薬の適正使用に向けた取り組みとしてクロルプロマジン換算、ジアゼパム換算、イミプラミン換算、ビペリデン換算を用いた「投与量の見える化」を行ったお話。そして最後に、地域の保険薬局に向けて「外来迅速検体検査加算」を活用し、お薬手帳を用いた検査値の情報共有についてお話をしていただきました。

勉強会終了後の全体会議では、次の開催についての検討が行われ、次回開催は西新潟中央病院が幹事施設と決定しました。日程や内容についてはアンケートの結果等を参考に、今年度中に実行委員が計画・提案すること等が決まりました。（写真3）

その後、さいがた医療センターの精神科病棟、医療観察法病棟、神経内科病棟、重症心身障害児（者）病棟の施設見学を行い、特に、医療観察法病棟は全国的で33施設のみであり、参加者からは貴重な経験をしたとのご意見をいただきました。

懇親会では講師を含め総勢27名が参加され、勉強会についての質問や、取り組み方について、様々な意見や情報交換を行うとともに、交流を深

めることが出来ました。

【アンケート調査について】

今回も県外からのご参加をいただいておりますが、今後も他施設より多数の方にご参加していただけるよう検討するため、アンケート調査を行いました。アンケート調査では、開催時期、場所、時間について適切であったと回答されていました。勉強会の感想では、「実施の業務に活かせる内容が多く、とても勉強になった」「今後は地域包括的ケアが重要であると理解した」「薬局薬剤師の役割についてよくわかった」「とても身近なテーマで良かった」「薬薬連携やポリファーマシーについて学べるのができて良かった」等の声が聴かれる反面、「実技のない勉強会だった」との意見もありました。今後、研修してみたいテーマでは、「働き方改革について」、「残業軽減の取り組み」、「地域医療連携関係の話」等や現在の業務に関連する内容の講演を希望されていました。

また、「フィジカルアセスメント」等の実技講習についての意見もありました。

勉強会を継続して行くことへの要望・意見については、「日程を早めに設定」、「役に立ち、持ち帰って使えるものの提供」、「アクセス等」の意見が上げられました。

来年度以降の継続した実施に向け、早期に勉強会内容・日程を決定し、関信地区へ向けて広報活動を行い会員へ関心を持って頂くことや、交通手

段・宿泊場所の確保等が挙げられると考えられました。

【検討課題】

今回の勉強会では東京から会場まで、北陸新幹線を使用し、途中の乗り換えや待ち時間を含め2時間30分ほどでした。アクセスとしては決して良いとは思えませんし、参加者の中には自家用車で参加者もおられました。前回、今回のように幹事施設を使用することで、施設見学も兼ねていると考えると今後も幹事施設での開催を検討していくべきか、県外他施設からの参加者のことを考慮しより利便性に優れた勉強会会場が良いのか検討をしていきたいと思っております。実行委員会では幹事施設の近隣の宿泊施設を活用し宿泊型の勉強会を開催することも提案され、これについても検討の余地があると思われま

【謝辞】

今回で新潟地区国立病院薬剤部（科）勉強会は5回を数えるまでになりました。新潟県内3施設OBの先生方に支えられ、今回も無事に開催することができました。研修会の講師を務めていただいた上越地域医療センター病院宮川哲也先生、新潟南病院武藤浩司先生、および実行委員の村上明男先生、青山大樹先生、池田雅司先生、花垣諒太先生、開催に際しご協力いただいた全ての先生方に、この場をお借りして深く感謝とお礼を申し上げます。



写真3